



ぴっぴだより

No.7. 2023. 9. 29

人生のターニングポイント

私がぴっぴスタッフになったばかりの頃、ぶつかってばかりいた私と夫。私が目の前のことばかりに夢中になっていたから。夫に大事なことを伝えきれていなかったから。夫のさり気ない優しさにも気がついていなかったから。その原因は私の内にいっぱいあったのに、夫の〈せい〉ばかりにしていた私。あれから5年。ぴっぴと共に歩みながら学びました。気がつけば、私たちは今、とても仲良しです。そして、私はとても元気になっていました。夫の後を追うように一緒に山に登り、古の道を歩き、トレイルを走り、車中泊の旅・・・休日のたびに早朝から出かける夫のパワフルさに、100%同行することはできませんが、今、心のどこかで「夫のように出来たら格好いいなあ〜」と思う私です。そんな気持ちで〈いつかウルトラ系に挑戦したい!〉と呟くと、夫はそんな私のために?、即、大会選択→提案→エントリー。なんとという行動力。練習時間確保については考えすぎないことにして、お互いできる範囲で頑張ろう!ということになっていました。子どもたちの心と向き合い、自分自身とも向き合うことの多いぴっぴでの日々を過ごしながら、ぴっぴとの出会いは私のターニングポイント!であり、夫の〈おかげ〉で自分らしく過ごせている今を実感しています。もしかすると、私は夫の畀に見事にハマっただけなのかもしれませんが。

そんな夫と出会ったのは、大学時代。ところは京都。私は音楽教育を学ぶ学生で、おしゃれなブランドに身を包んだ如何にも音大生といった感じのお嬢様たちと共にキャンパスライフを送る日々でした。田舎育ちで、小中高と体育会系の部活に励んできた私は、ショートパンツやジーパンが定番。さらに自分らしくいるためにはと、声楽やピアノの練習をしながらも、スキー部所属という変わり者。このスキー部にいたのが夫です。この出会いがなければ今がない。京都も私のターニングポイントか? 京都はその土地柄でしょうか。私の気持ちを緩め、行動力を存分に拡げてくれました。親元を離れた生活は試練と共に自由と責任を教えてくれます。チャンスがあればチャレンジする。失敗しても成功しても自分が変化(チェンジ)することが嬉しかったあの頃。そんな私を、親は黙って見守ってくれていたようでした。翌年には、京都に妹を派遣してきましたが。

話は変わり、去る9月9日。その日、私たち家族は東京の増上寺で大切な人とのお別れをしました。青木孝安先生。日本で初めて山村留学制度を始めた方です。私の息子は中学3年間を、青木先生が50年前に山村留学先として最初に立ち上げられた長野県大町市(旧八坂村美麻村)で過ごしました。息子は中学卒業の日、クラスメートの前で「ここにこれてよかった。ここに来なければ今の自分はいない。ありがとう」と涙ながらに語り、この山村留学が人生のターニングポイントだったと今でも言っています。身の回りのことをすべて自分でやりながら、農家の息子になり、現実の一人っ子とは違う疑似兄弟体験もしました。毎日、学校までの長い道のりを歩き、村の人たち

や一緒に生活していた仲間からたくさんのお話を教えてもらったのでしょう。辛い日々の出来事を親に隠しながら過ごした小学校生活。その最後の日の朝に「あ〜やっと、これで終わる」と語り、玄関を出て行った小6息子の姿とは大違いです。この山村留学時代、私は親として子どもを信じて待つことしかできない日々でしたが、そこで、彼が自分のこれからに希望をもって生きる人になって帰ってきたことはとても嬉しいことでした。ただその後、彼は何度も挫折をし、いろいろとやらかしています。山村留学で過度に自信をつけた体力ゆえ、高校時代の家出では軽井沢から埼玉までの道のりを歩くこと3日間。これ、今では笑い話ですが、この時も私は「生きて帰ってきてくれればそれでいい」と息子を信じて待つことしかできませんでした。息子のターニングポイントは私のターニングポイントでもありそうです。

この原稿を書いていると、「ただいま〜」と夫がその大町八坂での稲刈りを終えて帰ってきました。息子が山村留学でお世話になってからずっと、修園生とその親によるこの過疎地での田んぼ作業は続いています。昨晩はきっと全国から持ち寄ったお酒を酌み交わしながら父親同士の語りいで盛り上がったことでしょう。今はわかりませんが、子どもたちの学校生活において出番が多いのは母親だったあの頃。私たち留学生の親は決まった日にしか子どもに会うことができなかつたため、Welcomeな学校行事の日となれば、父親たちも「待っていました！」と張り切って出掛けたものでした。その時の繋がりが今もある。そう思うと、夫にとってもここはターニングポイントかもしれません。(勝手に俺のターニングポイントを決めるな！と怒られそう・・・)

冒頭で、びっぴとの出会いはターニングポイント！と書きましたが、その直前、私は自分史上最大の奈落の底に落ちていました。

ある方のひと言の〈おかげ〉で落ちたのです。ある方のひと言の〈せい〉ではありません。私はできた人間ではありませんので、勿論初めは、その方の〈せい〉だとしか考えられませんでした。悩んで、苦しんで、藻掻いて、泣いて、心から笑えない日々が2年。その方はそんな私と目を合わすことを躊躇っているようでした。どうにかしなくちゃ！何とかしなくちゃ！と考えてばかり。しばらくしてわかりました。ここは、何かを待つ時ではなく、自分で行動する時だと。行動して、ようやく先の未来が見えてきました。行動することで、〈せい〉が〈おかげ〉に変わりました。そして、私はその方に心からの「ありがとうございます」を伝えることができました。あの方の〈おかげ〉で次のステージを考えることができ、あの方の〈おかげ〉で今、私はびっぴにいます。あの方のあのひと言がなければ、今私はどうしているのだろう？

未知な人生。その歩む道を作っていくのは自分。世界は自分の知らないことで満ちていませんか。未だ知らないことを知る・・・その過程には山あり谷あり。この谷での出会いがターニングポイント！だと信じて行動すれば、人生のターニングポイントはまだまだあってよいのかも。多すぎるってことはないのかも。いろんなことがあっていい！

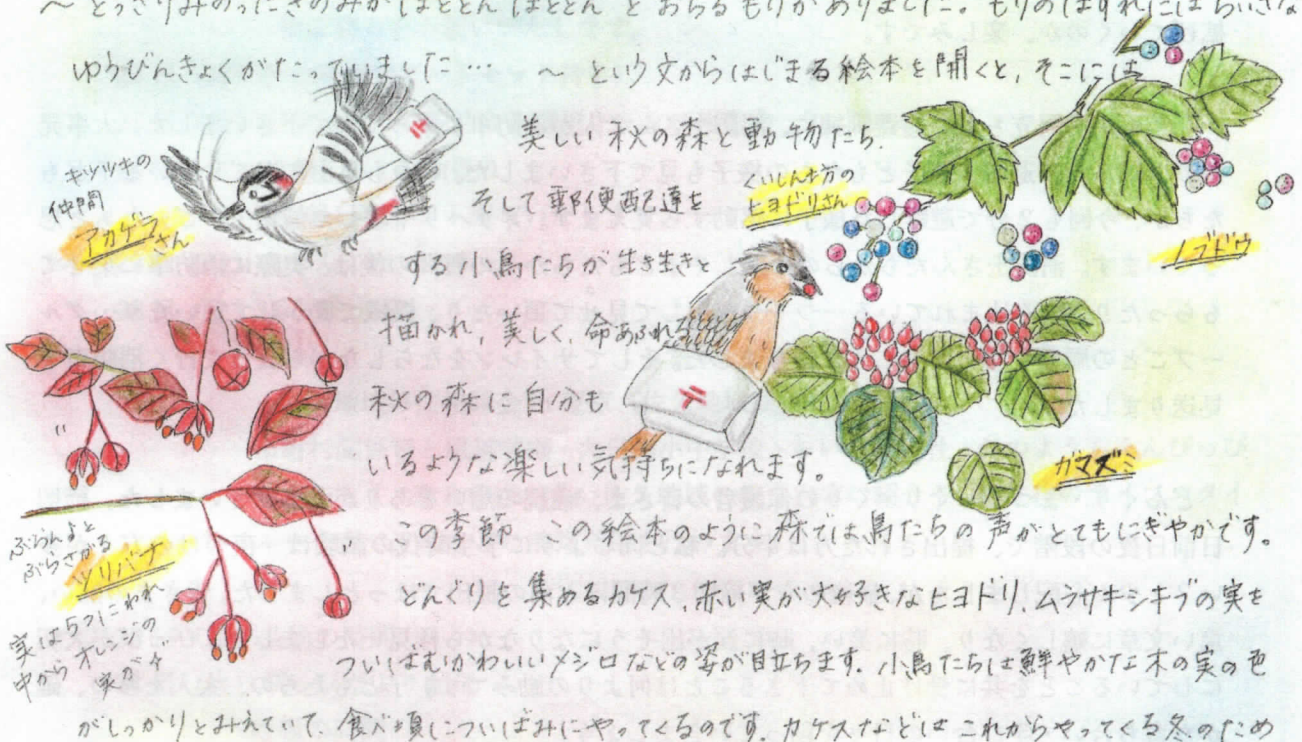
子どもたちの日々の一步一步、想いのひとつひとつに向き合いながら、また同時に、私の未知の世界をたくさん知っている大人たちと語り合いながら、私はびっぴでの生活のすべてに〈おかげさま〉を重ねています。いつも、ありがとうございます。 (超子)

森林と絵本と巡る季節 10月

「どんぐりが風でゴッソ！パラパラ...とおちてきたり、赤や紫の美しい木の実がなる季節になってきましたね。そんな季節にぴったりの絵本を今月もご紹介します。

『ほととんもりのゆうびんきょく』 杉本 深由起 さく 白石夕美子 え (福音館書店) です

「どっさりみのったきのみがほととんほととんとおちるもりがありました。もりのほすれにはいろいろなゆうびんきょくがたっていました。...」という文からはじまる絵本を開くと、そこには



キツツキの仲間
カケスさん

美しい秋の森と動物たち。

そして郵便西乙連を

くいんせいのヒヨドリさん

する小鳥たちが生き生きと

描かれ、美しく、命あふれる

秋の森に自分も

いるような楽しい気持ちになります。

ガマズミ

ぶらぶらと
おちる
ツリバナ
実は5つにわかれ
中からオレンジの
実がた

この季節、この絵本のように森では鳥たちの声がとてもにぎやかです。

どんぐりを集めるカケス、赤い実が大好きなヒヨドリ、ムラサキシキブの実を

ついでにかわいいメジロなどの姿が目立ちます。小鳥たちは鮮やかな木の実の色

がしっかりとみえていて、食べ頃についてみじかにやってくるのです。カケスなどはこれからやってくる冬のため

何百ものどんぐりを集め貯蔵するの、秋は大忙しの季節です。

...絵本では、お手紙が急に何通も届かなくなってしまう国王の

局長さんが郵便連人の小鳥たちが木の実を食べてみち草しているのでは？

と、赤いツリバナの実やガマズミ、色とりどりのノボドウの



ナナカマドの
お手紙を
運ぶ
カケスさん



クヌギ

場所へ採りにいきます。でも、鳥たちは

どこにもいなくて...

そして、お手紙はなんと...?

と続きはお楽しみなのですが、絵本の美しい木の実

やたくさんの生きもの達、色とりどりの森の描写を

みているだけで きっと秋の森にでかけたいくなる

と思います。子どもたちはもうすっかりそんな秋の森を

堪能していますね！さあ私たちもでかけよう〜！

菜々鬼